

**京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書**

平成25年 7月17日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局 理学研究科

職 名 准教授

氏 名 森 哲

助成の種類	平成25年度 ・ 研究成果公開支援 ・ 国際会議開催助成			
事業内容	第6回へび類生態学会議			
開催期間	平成25年 6月21日 ～ 平成25年 6月23日			
開催場所	沖縄県国頭村 国頭村環境教育センター やんばる学びの森			
参加者	総数 53名	内 訳 日本23名、アメリカ11名、台湾11名、 ベトナム2名、オーストラリア3名、スウェーデン2 名、 ニューカレドニア1名		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> 有(会議講演要旨集)			
会計報告	事業に要した経費総額	2,401,133 円		
	うち当財団からの助成額	1,000,000 円		
	その他の資金の出所	参加者による参加費、琉球大学共同利用研究会助成金		
	経費の内訳と助成金の使途について			
		費 目	金 額 (円)	財団助成充当額 (円)
		旅費交通費	358,327	273,817
		会場・会議費	75,000	75,000
		印刷製本費	104,035	97,335
		通信運搬費	237,464	98,823
		謝金	460,040	323,500
	消耗品費	258,004	131,525	
	レセプション費	569,846	0	
	会場宿泊費・その他	338,417	0	
当財団の助成について	本助成金の支援を得ることにより、参加者に大きな金銭的負担をかけずに会議を開催することができた。これにより特に学生が参加しやすくなったことの意義は大きい。助成金の執行にあたっては、京都大学に寄付金として委託する必要がある。このため、財団本来の趣旨である経費執行上の柔軟性がやや失われ、当初の予算案通りに進めることができない場合があり、若干の支障が生じた。これは京都大学本部執行部の問題ではあるが、この点を財団側からも当局に指摘していただきたい。			

成果の概要／森 哲

第6回ヘビ類生態学会議を2013年6月21日（金）から6月23日（日）にかけて、沖縄県国頭郡国頭村の国頭村環境教育センター「やんばる学びの森」にて開催した。会場は公共交通手段では訪問できない場所に位置するため、参加者の多くは那覇市内のホテルと会場間を大型送迎バスにより移動した。

参加者は当初の見積よりも下回ったが、合計53名に達した（写真1）。参加国は日本、台湾、アメリカ、ベトナム、オーストラリア、スウェーデン、ニューカレドニアの合計7カ国であり、男性が40名、女性が13名であった。これらのうち大学院生およびポスドクは16名、残りは教授等の教員であった。会議においては、21日と23日のそれぞれに特別講演が4題、22日に一般講演21題とポスター発表8題が行なわれた。



写真1：会議参加者の集合写真

21日の特別講演では、まず会議主催者である森が本会議の趣旨と歴史について簡単に解説し、その後、日本のヘビ類学における生態学の現状について概観を説明した（写真2）。続いて、共同主催者である琉球大学熱帯生物圏研究センターの戸田守准教授とその大学院生である皆藤琢磨氏の共同発表により、会議開催地域である琉球列島におけるヘビ類の生物地理学的研究を紹介した。さらに、京都大学のポスドクである角田羊平博士が、開催地である山原に生息する爬虫両棲類の生態の紹介を行なうとともに、ヒメハブの採餌行動の個体レベルでの特殊化に関する研究発表を行なった。さらに、台湾のピントン科学技術大学のテインシュン・ツァイ助教による台湾におけるヘビ類の生態の紹介が行なわれた。



写真2：会議開催の挨拶をする主催者

22日の一般講演は4つのセッションに分けて行なわれた。最初のセッションではスウェーデン、アメリカ、日本におけるヘビ類の活動性や保全に関わる発表が行なわれた。次のセッションでは、ヘビ類の行動的特性に関連した生理学的適応やメカニズムの発表と、化石証拠や分子遺伝学的解析に基づくヘビ類の進化に関する発表が行なわれた（写真3）。残りの2つのセッションは、昼食とポスター発表を間において、午後2時から開始した。第3セッションでは、まずウミヘビに関わる発表が3つ行なわれ、続いて、グアム島とフロリダでそれぞれ移入種として問題になっているミナミオオガシラヘビとビルマ



写真3：講演を聞く参加者

ニシキヘビへの対策についての講演がなされた。最後のセッションでは、採餌行動や縄張り行動に関する実験および観察、体色の機能に関する野外実験、および、繁殖と成長の関連についての飼育実験の研究結果が発表された。これら合計21題の発表は6カ国からの参加者によって行なわれ、海外の研究者による発表は全体の3分の2を超えた。それぞれの発表のあとには質疑応答が活発に行なわれ、多くの意見交換や議論がなされた。

ポスター発表は、日本人の学生によるものが3題、台湾の研究者によるものが3題、アメリカとベトナムの研究者によるものが各1題であった。ポスター発表専用の時間は22日の午後に1時間が充てられており、発表者らと多くの参加者との間で活発な議論がかわされていた。

23日の特別講演では、まずシドニー大学のリチャード・シャイン教授がオーストラリアでこれまで行なわれてきたヘビ類の生態学や行動学に関する研究の紹介を行なった。続いて、ベトナム国立博物館のグエン・タオ研究員がベトナムにおける毒ヘビ咬症の現状と毒ヘビ類の実態について講演した。3題目の講演では、テキサス大学タイラー校のニール・フォード教授が北米のヘビ類の生態についての概観を解説した。本会議の最後の講演として、兵庫県立博物館の太田英利教授が琉球列島におけるヘビ類の生活史と保全対策の現状について講演した。

21日の夕方には懇親会が催され、夜遅くまで参加者の間で活発な議論や情報交換がなされた。また、昼食時やテーブルブレイクの時間帯にも参加者が集い、国際的な顔ぶれの間で友好的な交流がなされた（写真4）。



写真4：休憩時間にバルコニーで団欒する参加者

22日の夕食後には、4つのグループに分かれて山原の野外調査地の視察を行なった。各グループは座津武川上流の溪流沿いの2ルート、琉球大学与那演習林周辺の林道ルート、及び、与那覇岳の林道ルートのいずれかを踏査した。これらの視察では、ヒメハブ、アカマタ、ガラスヒバア、リュウキュウアオヘビ、アマミタカチホなどのヘビ類が発見され、多くの参加者が沖縄島におけるヘビ類の生息地やその活動の様子を直接観察することができた。23日の会議終了後には、那覇市内へ送迎バスで戻る途上で、やんばる野生生物保護センター「ウフギー自然館」を訪問し、山原の自然に関する展示を見学した。



写真5：ハブの毒牙についての説明をうける参加者

6月24日の午前中には会議の付属イベントとして南城市にある沖縄県衛生環境研究所を18名の参加者が訪問した。本研究所にはハブ類の生態および毒性に関する研究を専門に行なっている施設があり、沖縄島におけるハブの生息状況や飼育実験、抗毒素血清の開発実験などについてスタッフから説明を受け、意見交換を行なった（写真5）。

本会議の開催前日には台風が沖縄に接近し、一時は開催中止も危ぶまれたが、幸い、特に大きな支障もなく会議は予定通り開始できた。会議終了後には参加者の多くから賛辞をいただき、米国以外でののはじめての開催となったヘビ類生態学会議は成功裡に終了することができた。